恋のはなし 2

山田ハルコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のはなし2

【Nコード】

N7847U

【作者名】

山田ハルコ

【あらすじ】

「愛しています、涼子さん。僕と結婚してください」「嫌です」

三か月前から、涼子はこの男に付きまとわれている。顔よし、頭よし、家柄よしの涼子には上等すぎる人。夢みたいな話だ。大歓迎である。

彼の求婚の理由が、涼子が大好きなアニメのヒロインに似ているというモノでさえなければ。

（ 以前投稿した短編の続きになります ）

付きまとう男（前書き）

以前投稿した短編の続きです。
批評、感想、いただけたらとても喜びます。

付きまとう男

「愛しています、涼子さん。僕と結婚してください！」
「嫌です」

相変わらず豪華な花束を持参し、大学の正門前で涼子が出てくるのを待ち構えていた男は、この三カ月で挨拶のようになった求婚の言葉を懲りもせず繰り返す。

顔よし、頭よし、家柄よしのこの男　綾小路星彦は、涼子の通う女子大ではちょっとした有名人だった。

彼は、同じ市内にある旧帝国大学の学生だ。学年は涼子の一つ上。彼女が女子大に入学した当初から、星彦の噂は学内にあった。

曰く、なにをとつても完璧な平成の王子様。

そんな男が毎日のように涼子に会いに来るものだから、星彦の求婚攻撃が始まった当初は涼子もひどい目にあった。

嫉妬、やっかみ、羨望。

彼がアニメのヒロインに涼子を重ねているとは思ってもよらない女たちは、寄つてたかつて涼子を攻撃した。

廊下ですれ違いざまに罵られることはしょっちゅうだったし、空き時間に呼びとめられて囲まれ、集団で責められたことすらあった。星彦にお近づきになりたい者は涼子にすり寄った。

三か月が経つ今は随分と少なくなったものの、完全になくなるというわけでもない。涼子はそのすべてに辟易しつつも、なんとか耐えている。

（この人たちはあの男の残念さに気付いてない被害者…あの男の見てくれに騙された被害者…）

そして涼子に付きまとう星彦のほうも、大分騒がれていたらしい。

あんな女に告白するなんて悪いものでも食べたのかとか、風邪でも引いて頭がおかしくなったのかとか。

しかしその異常行動も三か月目となると、周囲の見方も変わるようだ。平成の王子様と陰で騒がれていたはずの男は、今やすっかりとその評価を変えていた。

曰く、平凡女のストーリーカー王子。

随分と落ちたものだ。

涼子は差し出された花束を今日も受け取らないまま、憐みすら覚えて、跪く星彦を見下ろした。涼子の視線に気づいた男が、ぱっと顔を輝かせる。

「この後なにか予定はありますか？よければ一緒にお食事でも、」
「お断りします」

「相変わらずお忙しいのですね。ああ、できることならあなたの抱える重荷すべてを僕が代りに引き受けて差し上げたい」

「結構です」

忙しい、というのは毎度なされる彼の勘違いだったが、今回はかりは少しあたっている。

星彦に付きまとわれるようになって三か月。

夏季休講を目前に控えた現在、涼子は大量のレポートとテスト勉強を抱え込んでいた。

それは目の前の男も同じはずなのだが、星彦はそんなそぶりも見せない。仮にも難関大の学生、抱える課題は涼子よりも重いだろうに。

「…あなた、学校はどうなの？レポートとかテストとか、大変なんじゃない？」

つい気になって聞いた涼子に、星彦はあっさりと答えた。

「レポート？テスト？レポートなら一日あれば書けますし、テストなんて授業に出ていればとけるでしょう？」

…この天才が。

授業を聞くだけでテストが解けるなんて、小学校を卒業して以降あつてはならない現象である。

「ああ、涼子さんが僕に言葉をかけてくださるなんて！マグノリアの神よ、感謝します」

大好きなアニメの世界観にとっぷりとつかって、星彦は胸で六芒星をきる。いつも以上にまぶしい美貌は、ここではない世界を見つめてとろけるような笑みを浮かべていた。

…このまま現実に戻ってこなければいいのに。
今のうちに帰ろうと歩きだした涼子だったが、素早く立ちあがった彼に進路をふさがれた。

「涼子さん、夏休みのご予定はどうなっていますか？よければ僕と、
」
「実家に帰ります。夏休みが終わるまでこちらには戻りません」

涼子は淡々と嘘をついた。夏休み中まで付きまとわれてはたまらない。

信じたかどうかは分からないが、星彦は大げさに肩を落とした。

「…そうですね。残念です。夏中あなたにお会いできないなんて
」
「アニメのミーナを毎日眺められるじゃない」

「もちろん、ミーナとの時間は取るつもりです。だけど僕は、涼子さんとの時間も欲しい。…マグノリアの神よ、この強欲は罪なので

しょうか」

なんとというか、顔がいいって得だ。何をやっても様になるから、他の誰かが言えば確実に気持ち悪がられる発言も聞き逃せてしまう。ストーリーまがいの待ち伏せと求婚だって、彼がやるから許されているのだ。一方の同情を向けられるべき涼子は陰でたたかれ、面と向かって罵られる。

(なんなのよ、この差)

考えてしまえば苛立ちが湧いてくる。

涼子は進路をふさぐ星彦の肩を強く押した。

「どいてください、帰りたいので」

「涼子さんが僕に触れてくださった！マグノリアの神よ…！」

本当になんなんだ、この人。

苛立ちがしおれるくらい疲れを感じて、涼子は溜息を吐くのだった。

動揺する女

「彼に付きまとわれないでほしいの」

登校してきたところを、正門前で背の高い美女に呼び止められた。ひと通りの少ない細道まで引つ張っていかれ、ようやくこちらをみた彼女は、開口一番きつい口調で涼子に向かってはつきりと言う。

「迷惑なのよ、あなた。こんなにも長く付きまとってるなんて信じられない。ストーカーみたいだな真似しないで。綾小路君だって優しいから言わないだけで内心はうんざりしてるんだから」

その言葉をそのまま星彦に告げてほしいと涼子は思う。

ストーカーみたいに付きまとっているのは星彦で、うんざりしているのは涼子のほうなのだ。

ストーカー王子のあだ名まで付いているのに、彼女はそれを知らないのだろうか。

半ば憐みの目で見返すと、対面する美女は大きな瞳を釣り上げた。

「ちょっと、聞いてるの?!」

「…あの、あたし授業があるので失礼します」

「ごまかさないですよ。綾小路君に付きまとつのをやめてって言ってるの」

「それはあたしじゃなくて彼に言ってください」

涼子だって望んで星彦と顔を合わせているのではない。何度断つても涼子の前に現れるのをやめないのは、彼なのだ。

星彦に付きまとわれるのも、それを周囲に勘違いされるのも、そ

のせいで涼子が責められるのもすべて、うんざりだ。
そう思えば、意図しないままにため息がこぼれた。

「…っ、ふざけないでよー！」

そのことがどうやら、美女の気に障ってしまったらしい。ぱん、と気味のいい音を立てて、涼子は頬をひっぱたかれた。

「調子に乗るのもいい加減にして！彼に好きだなんて言われて、いい気になってられるのも今のうちなんだから。あんたみたいな女、綾小路君が本気で相手してるはずなのよ」

本気で相手してるはず、ない。

なぜか、その言葉が耳に残った。

呼び出されて罵られることなら今までにも何度かあったが、頬をたたかれたのは初めてである。

自分は動揺しているのだ、きつと。

返す言葉が見つからないまま、涼子は自分をたたいた女を見つめた。

「綾小路君に付きまとわないうって約束して。いい加減不愉快なの」

だからそれは、彼に言わなきゃ、どうにもならないことなのに。

理不尽だと主張したくなる思いを涼子はこらえた。その言葉では相手が納得してくれないのだから、堂々巡りになる。

悔しいような悲しいような、不快な感情が胸の内をひっかきまわす。

痛むほほを手でおさえて、涼子はきつい視線から逃れるようにうつむいた。

「…分かりました。ちゃんと、話してみます」

なぜ、名前すら知らない女に傷つけられなくてはならないのか。なぜ、彼女のために言葉を選ばねばならないのか。

「言ったからには、守りなさいよ」

うつむいた涼子に指を突き付けてそう言うと、美女はさっと踵を返した。

二度と来るなと念じながら、涼子は彼女が遠ざかっていくのをただ待った。

「…授業、出よう」

頬から手をどけ、自分に聞かせるためにつぶやく。
学校に向けて運ぶ足がひどく重たいと感じた。

（本気で相手にされてない、か…）

頬を張られたときに言われた言葉がまた、思いだされる。涼子を傷つけようという意図からすればまったく的外れであるはずのそれが、妙に引っかかっていた。

（本気なわけ、ない。そんなこと、言われなくたって分かってる）

歩きながら、涼子は星彦のことを考える。

大好きなアニメのヒロインに似ているからという、ふざけた理由で彼女に求婚する男。涼子が何度断っても、彼は付きまとうことをやめない。

それはきつと、子供が人形を構うのときさして変わらない興味だ。

アニメのミーナにそっくりな女と、ちょっと話してみたいという衝動。

涼子も当然、彼が本気だなどとは思っていなかった。

彼が毎日のように訪ね求婚している相手は“現世のミーナ”だ。

二次元の少女の面影を現実の人間に重ねてしまっくらい彼はミーナを愛していて、その延長で涼子に好きだと告げてくる。

彼が好きなのは『ミーナに似ている女』であって涼子ではない。

彼が話しかけるのも会いたいと望むのも、すべてはミーナだ。

涼子だってそれをきちんと理解していた。出会った初めのころ、

彼は涼子を“現世のミーナ”と呼んで憚らなかったから。

間違えてしまったのはいつからだろう。

毎日毎日、飽きもせず告げられる言葉を聞くうち、涼子はそれを無意識のうちに、心のどこか奥のほうで、自分に向けてのものと勘違いしてしまっていた。

彼が“現世のミーナ”でなく“涼子さん”と呼びかけるようになったのもいけなかった。知っていたはずのことが、分からなくなる。彼が好きなのは“現世のミーナ”だと理解する一方で、彼が“涼子”に対して好きだと告げているようにも感じていた自分に、涼子はようやく気づいた。

(なにそれ)

理不尽だ、と思う。

涼子のことを本気で好きなわけでもない男の言動に、こんなにも振り回されている。さらに涼子はその男のせいで責められ、痛い思いまでしているのだ。

(あたしがなにをしたっていうのよ)

この際、マグノリアの神でも構わない。
この理不尽さを正してほしかった。

変化する彼ら

「愛しています、涼子さん。僕と結婚してください」
「嫌です」

いつもに増して投げやりに、涼子は答えた。

朝のやり取りで抱えた苛立ちは夕方になっても薄まらないまま、涼子の腹の下のほうに澱のように溜まっている。

涼子の事情など知らない：知る気もないだろう星彦は、相変わらぬ美貌に甘い笑みを浮かべて涼子を見つめてくる。

「ああ、涼子さん、青いブラウスがとても似合っていていらっしやる。青い洋服はお好きですか？ミーナも青が、」
「あの」

ミーナ、という言葉になぜか耐えがたいものを感じて、涼子は彼の言葉を遮っていた。

今日の自分はどうかしている。

朝から嫌な目にあつたせいで、うまく頭が回らない。

「…あの、この後ちょっと時間ありますか。話があるんです」

いつもなら星彦が言うセリフを、今日は涼子が口にした。

一瞬、彼は言葉の意味を測りかねるような顔になる。

「…それは、お誘いの言葉と受け取ってもよろしいですか？僕を誘ってくださいるんですか、涼子さん？！」

「え、は、はあ。ちょっと、ひとに言われて」

「ひとに言われて？ああ、それでも構いません。マグノリアの神よ、

感謝します！」

突然立ち上がった涼子に詰め寄った拳句、胸に六芒星印をきつてマグノリアの神とやらに祈りをささげだす。今日の星彦もぶっ飛んでいる。

この男のどこがいいのか、涼子にはちっとも分からなかった。

「さあ参りましょう、涼子さん。好きな料理はありますか？僕の知る限り最高の場所へご案内します」

「ファミレスで」

顔がよくて、金持ちで。

甘い眼差しでこちらを見つめ、当たり前のようにエスコートしてくれようとする。

彼のいいところなんて、大したもんじゃない。

ほんとうに。

「ファミリーストランなんて、中学校の社会見学以来です」

ドリンクバーをめずらしげに眺めとりあえず気のすんだらしい星彦は、紅茶を片手に戻ってくるなりそんなことを教えてくれる。

社会見学でファミレスに来るって、どんな学校。

涼子は取ってきたメロンソーダに口をつけ、聞きたくなくなる気持ちをこらえた。世間話がしたくて誘ったわけではない。

「…今日、女の人に会いました。あなたに近づくなと言われて困りました。あたしからあなたに近づいてるわけじゃないし、そんなの

あたしに言われてもどうしようもないと思っんです」

単刀直入に、涼子は切りだした。

「これまでも言われてたんです、そういうの。告げ口するのも嫌だと思っって言わなかったけど、考えてみればあなたのせいであたしが嫌な思っするの納得がいけないですし」

「…誰が、」

「誰がやっただかとかはいいんです。あたし、あなたにちゃんと聞っうと思っただけなので。…なんで、あたしに会いに来るんですか？」

この三カ月で一番真摯な気持ちで、涼子は目の前の男と視線を合わす。対する星彦も、涼子に求婚する熱心さとは違っ温度の真剣な表情を返してくれた。

「あなたが好きです、涼子さん。だから、あなたが僕を歓迎してくださっっているわけではないと知りながら、お会いしたいと思ってしまっ」

…それなのに、彼の口から出たのはいつもと同じ、薄っぺらい告白である。

憤りのような惨めさのような感情がこみあげてくるのを、涼子はこらえた。

「あたし、ちゃんと断っってますよね。あなたの気持ちには答えられません」

「何度断られても、涼子さんにお会いしたいと思っは止まませんです。…あなたが不快な目にあっていらっしやるとは知りませんでした。申し訳ありません」

謝罪の言葉は、涼子の耳を通り過ぎた。

(涼子さんに、お会いしたい?)

告げられた言葉がぐるぐる回る。

「…あなたが会いたいののは“現世のミーナ”でしょう?ちゃんと言ってください。あたし、間違えてしまうから」
「いいえ、涼子さんです」

いつかもしたやり取りだった。
その時は聞き流せた言葉なのに、いまは無理だ。どうしてかわからないけど、胸が苦しい。

「あなたが好きなのはミーナですよ。ミーナに似ているからあたしに会いに来るんでしょう?」

「…涼子さん、」
「うんざりなんです。そんな理由で好きだの愛してるだの言われるのも、そのせいで知らない女の人に責められるのも。あたしは、…あたしはミーナじゃありません」

告げる一瞬、どうしてか涼子は怖いと感じた。はっきり口にして言えば、失望されるような気がした。
どうかしている。

彼女がミーナでないことなんて、星彦も分かっているはずなのに。
「あたしをミーナの代わりにして遊ぶのはやめてほしいんです。ミーナに会いたいなら、アニメを見てください」

星彦はふたつ、瞬きをした。

「ミーナはニンジンが嫌いなんです」

…この会話の流れでなぜミーナの好き嫌いが出てくるのか。
苛立ちもあきれも通り越して、虚しさが胸に広がった。

毎日のように好きだと言いながら、そのくせこの男は涼子のことなどちつとも見ていないと、改めて気付かされる。“現世のミーナ”に涼子という人格があることすら、星彦は気づいていない。

顔よし、頭よし、家柄よしの王子様は、アニメのヒロインに恋をしていた。

(…最悪)

分かっていたことなのに、今また傷つけられたような気持ちになるなんて。

「ミーナはニンジンの色がいやなんです。ミーナが言うには、ものにはそれにふさわしい色があってニンジンの赤は根菜としてあるまじき色だと。そんな言葉すらニンジンを食べられない言い訳のようで、僕はますますミーナを好きになってしまいました」

「…だから何なの」

「涼子さんはニンジンが好きだ」

甘く整った顔立ちで、星彦はなんの屈託もなさ気に微笑む。

「帰り道でニンジンベースの野菜ジュースをよく買っているでしょう？ニンジンケーキを食べているのも見たことがあります」

「…」

「初めてあなたとお会いしたとき、僕は確かに、この現世にミーナが降り立ったようだと思います。マグノリアの神が僕の願いを聞

きつけ、慈悲を下さったのかもしれないと浮かれたんです。…でも、あなたはミーナではない。三か月も言葉をかわしていれば気付きます。そして僕は、そのことが決して嫌ではなかった」

告げられた言葉の意味が分からなかった。

彼の言うことが理解できないなんていつものことなのに、いつもなら感じないもどかしさが湧いて出る。

さっきまで感じていたはずの虚しさは消えていた。

「涼子さんがミーナと違うと知ることを、僕は不快には感じなかった。嬉しいとすら思ったんです。この三カ月で、僕はミーナとは違うあなたを…涼子さんを、好きになっていました」

まっすぐな目だった。

この三カ月間ですっかり慣れた視線だ。跪いて花束を差し出すとき、彼はいつもこんな目で涼子を見上げる。何とも思ったことのない眼差し。

それなのに今、こんなにも頬が熱くなるのはなぜか。

「…っ」

思わず顔をそらした涼子に、星彦が微笑む。

甘い笑みだった。

「愛しています、涼子さん。僕とけっ…つきあってくださいー！」
「嫌です…て、え？」

あれから、彼はいつものように涼子を駅まで送った。真摯な告白が嘘のように、いつも通りの星彦だった。

三か月ですっかり日常と化した大学の正門前でのやり取りは、今日もまた当然のように繰り返される。

おなじみの求婚、おなじみのお返事。

…それなのに、告白の内容が少し変わったただけで途端に返す言葉に戸惑ってしまうのはどうしてだろう。

というよりなぜ、彼は結婚からお付き合いに求める言葉を変えたのか。

「友人に助言をもらったんです。好きになった人と近付くには、まずお付き合いを求めるのが正しい手順だそう。いきなり結婚を持ち出すのでは重いといわれました」

涼子の思考を読んだかのように、星彦は言う。

「涼子さん、三ヶ月間の僕の無礼をお許してください。ミーナはまず求婚されて、最終的にはそれで是と答えたので、思い至らなかったのです」

また、ミーナ。ちっとも変わらない彼の言葉。

それなのになぜ、こんなにも顔が熱くなるのか。

「このあと、なにか予定はありますか？もしよければ、一緒に食事に行きましょう」

続く誘いも、いつもの通り。

…差し出された手に手を重ねてしまったのはきつと、気の迷いだっただ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7847u/>

恋のはなし2

2011年7月23日14時41分発行